

日文系畢業生職涯形成中善用機緣論之適用： 以複線路徑等至性模式分析(TEM)為例

董莊敬

文藻外語大學日本語文系教授

摘要

本研究從「無法預期的偶發事件」觀點，透過對日文系畢業生職涯形成之深度訪談調查，並運用複線經路等至性模式（TEM）進行分析，探討計畫性偶發理論運用的可能性。根據研究結果，可提出下列5項重點。（1）具備一定水準的日語能力，為畢業生進入臺灣之日系企業或赴日就業之必要前提；（2）在職場適應過程中，抗壓能力與人際溝通能力為關鍵要素；（3）以人際網絡為媒介所觸發之偶發事件，能夠轉化為職涯發展之重要轉機；（4）持續保持好奇心與冒險精神，並在進入陌生領域或新興專業時，善用日常學習經驗之積累及事前準備，對職涯發展具有正向作用；（5）即使受到社會方向性（SD）或社會支持（SG）的影響，仍能以積極的態度接納並回應此類偶發事件，將其轉化為有利之發展契機。

關鍵詞：日文系、畢業生、職涯形成、善用機緣論

受理日期：2025年08月27日

通過日期：2025年11月07日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202512_(45).0005

The Application of Planned Happenstance Theory in the Career Development of Graduates of the Department of Japanese: An Empirical Analysis Using Trajectory Equifinality Modeling (TEM)

Tung, Chuang-Ching

Professor, Department of Japanese, Wenzao Ursuline

University of Languages

Abstract

This study empirically examines the applicability of Planned Happenstance Theory in the career development of Japanese language department graduates, using interviews analyzed through Trajectory Equifinality Modeling (TEM). Findings indicate five key points: (1) proficiency in Japanese is indispensable as a prerequisite for employment in Japanese or Taiwan-based Japanese companies; (2) stress tolerance and interpersonal communication are essential for workplace adaptation; (3) unplanned encounters mediated through personal networks can serve as turning points in career trajectories; (4) curiosity, risk-taking, and accumulated learning experiences are vital in engaging unfamiliar domains; and (5) adopting a proactive stance in accepting unexpected events, even under social direction or influence, is critical. These insights highlight the explanatory potential of planned happenstance in career education.

Keywords: Department of Japanese, Graduates, Career Formation, Planned Happenstance Theory

日本語学科卒業生のキャリア形成における計画的 偶発性理論の適用 —複線経路等至性モデリング（TEM）による分析—

董 莊 敬

文藻外語大学日本語学科教授

要旨

本研究では、予期せぬ偶然的な出来事という視点から、日本語学科卒業生のキャリア形成についてのインタビュー調査を通して、複線経路等至性モデリング（TEM）を用いた分析を実施することにより、計画的偶発性理論の適用可能性を実証的に検討する。分析結果、以下の5点が示唆された。第1に、一定水準の日本語能力は、台湾における日系企業や、日本企業に就職する際の前提条件として欠かせないものである。第2に、職場適応においては、ストレス耐性および対人コミュニケーション能力が重要視される。第3に、人的つながりを媒介とした予期せぬ偶発的な出来事をキャリアの転機へと活用することが可能である。第4に、常に好奇心や冒険心を保持し、不慣れな領域や分野に踏み込む際にも、日常的な学習経験の蓄積や十分な事前準備を活かすことが求められる。第5に、社会的方向付け（SD）、もしくは社会的助勢（SG）によって影響を受けたとしても、その予期せぬ偶発的な出来事を前向きに受容し、積極的に対応する姿勢が重要である。

キーワード：日本語学科、卒業生、キャリア形成、計画的偶発性理論

日本語学科卒業生のキャリア形成における計画的 偶発性理論の適用 —複線経路等至性モデリング（TEM）による分析—

董 莊 敬

文藻外語大学日本語学科教授

1. はじめに

就職に関するキャリア理論の既存研究において、将来の明確な目標に基づき、計画的に人生設計をデザインする「キャリア・プラン」や、「キャリア・デザイン」などのマッチング理論、発達理論に関するアプローチの重要性が注目を集めてきた。一方、近年におけるキャリア理論の研究分野では「計画的偶発性理論」という新しいアプローチが脚光を浴びている（浦上・矢崎・杉本・高綱 2023）。

計画的偶発性理論とは、われわれの日常生活の中で気づかぬうちに、個人が他者となんらかの出会いや、予期せぬ遭遇した出来事が多々あるにも関わらず、その出会いや出来事の一連の因果関係が、われわれの人生行路に影響を及ぼす可能性があること示しているものである。その偶然の影響は、一見大したことではないと見逃されている場合が多いものの、個人の就学経歴、成長経歴、職業経歴、家族経歴などのライフコースのアプローチを用いて捉えると、予期せぬ偶然の出来事の影響が散見される。

本研究は、予期せぬ偶然的な出来事という視点から日本語学科の卒業生のキャリア形成を捉え、インタビュー調査に基づき複線経路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling: TEM）を用いた分析を行うことにより、計画的偶

発性理論が日本語学科卒業生のキャリア形成における適用可能性および解釈力を実証的に検討することを目的とする。

日本語学科卒業生を対象に研究を行う主な動機は、(1)筆者が日本語学科に所属する教員であり、それゆえ日本語学科に属する学生の職業意識や、職業レディネスにも関心を持っていること、(2)筆者が長期に渡り日本語学科の学生に関するキャリア形成、教育職業的リリバンス、キャリア教育について研究をしてきた。それゆえ、関連研究の蓄積があること、(3)日本における労働市場の規制緩和により、台湾からのグローバル人材が過去10年前と比較して増加する傾向にあること、などが挙げられる。

2. 先行研究

2.1 計画的偶発性理論に関する研究アプローチ

計画的偶発性理論は、Mitchell et al. (1999) が提案した「プランドハッピースタンス理論 (Planned Happenstance Theory)」であり、個々人が進路選択の際に予期せぬ偶然的な出来事でキャリアに大きな役割を果たしており、またその予期せぬ偶然的な出来事を生み出すことを計画し、受け入れるようになるまでのことである (Mitchell et al. 1999)。この理論は、社会的学習理論の基本テーゼである行動要因、環境要因、個人要因の三つの要因に深くかかわり、変化しつつある環境で学習に予期せぬ偶然的な出来事が多数存在している。個々人がこうした環境で如何に予期せぬ偶然的な出来事を把握し、自らの学習の機会に転化するかは計画的偶発性理論の主なテーゼである。肝要となる事柄は、予期せぬ偶発的な出来事は単に待っているだけで、幸運が降り注がれるのではなく、つまり予期せぬ偶発的な出来事を最

大限に作りだすために行動すべきことである (Kurmboltz et al. 2004=2005)。それゆえ、常に好奇心、持続性、柔軟性、樂觀性、冒險心を持つことが肝心である (Mitchell et al. 1999)。

Granovetter (1985=1998) は、「弱い紐帶」と「強い紐帶」の仮説に基づき、専門的・技術的労働者が転職する際に活用する最も効率的な人的つながり（ソーシャルネットワーク）について分析を行った。その研究結果によれば、アメリカでは遠い親戚や小学校の友人などのまれにしか会わない者、すなわち「弱い紐帶」を利用して就職する者が現職の職務満足度が高く、現職を離職する可能性が低いという (Granovetter 1985=1998)。一方、日本で実施された「2002年東京調査」では弱い紐帶を通して就職した者の現職の職位は高くなり、さらに、転職で弱い紐帶を利用した場合、転職後の年収が増加したとも報告されている(渡辺 2014)。アメリカでの研究のみならず、日本での研究においても、ショブ・マッチング過程で人的つながりを活用すれば、転職する際に有力なツールとなり、効率的な入職方法となっていることが明らかになった。とりわけ、弱い紐帶の活用では、現職での賃金や職位にプラスの影響を及ぼしていることが再び証明された。しかしながら、転職者は「まれにしか会わない者」という弱い紐帶に如何に出会ったのか、それが如何なる場面で予期せぬ出会いとなったのか、如何なる協力を獲得したのか、などの課題が深く論及がなされていないと言わざるをえない。

下村ほか (2007) が計画的偶発性理論に関する先行研究から、「人との偶然の出会い」というテーゼがわれわれのキャリアに対して最も大きな影響をもつていると、指摘した。しかしながら、こうした偶然的な要因が純粋にキャリアに大きな影響を及ぼすのではなく、「本人の職位や個人の特性」

によって左右される可能性があるという。換言すれば、個々人が物事の原因を説明する場合、しばしば外的な要因に帰属する傾向がある。また、自らがその原因を説明できかねる場合、偶発的要因に帰属しがちだという。

浦上ほか（2017）はMitchell et al. (1999) の提示した五つのスキルの概念の延長線に沿って興味探索スキル、継続スキル、変化スキル、楽観的認識スキル、開始スキル、紐帶スキルという境遇活用スキルの尺度（CPFOST）の作成を試みた。Mitchell et al. (1999) は就職機会に注目しているが、浦上ほか（2017）は作成した境遇活用スキル尺度が日々の生活領域に拡張し、それが予期せぬ偶発的な出来事に活用することが可能だという結果を報告している。

吉川（2018）は、Kurmboltzの計画的偶発性理論に関する研究の多くは「理論の適用性」のみに焦点を当てて論じられたものが多く、カウンセリングに実践的に応用する有用性について論じられたものは十分ではないと指摘している。また、Kurmboltzの計画的偶発性理論の共通性は、首尾一貫してハプンスタンスの標準化、好奇心の特定、成功体験からの勇気づけ、行動の重要性の認識、障害への対応の五つの文脈がみられるという。

浦上ほか（2023）は、計画的偶発性理論の概念を用い、大学入学後における予期せぬ偶発的な出来事や新たな学習機会の発生が、学生の適応プロセスに如何なる影響を与えるかを検討した。その結果、計画的偶発性理論において提示されたスキル（好奇心、持続性、柔軟性、楽観性、冒険心）を保有することは、大学入学時における学校生活への適応感を高め、入学前後におけるリアリティ・ショックのネガティブな作用を軽減させる効果があることが示された。

2.2 先行研究からの示唆

以上の先行研究の検討から明らかなように、計画的偶発性理論は Bandura (2019) の社会的学习理論 (Social Learning Theory) の影響を受けて形成された理論である。同理論は、人間が生活の中で直面する予期せぬ偶発的な出来事においてそれによって生じた新たなことを学習したり、遭遇した困難を克服したりしていく過程を説明する枠組みである。また、計画的偶発性理論の適用は、就職活動における予期せぬ偶発的な出来事が個々人のキャリア形成に影響を与えるという点にとどまらず、我々の日常生活の広範な領域に及び、学習や行動選択に多大な影響を及ぼすことが自明である。

しかしながら、計画的偶発性理論に関する実証的な研究に関しては、以下のような問題点を指摘することができる（下村ほか 2007、浦上ほか 2017）。

第1に、ライフコースにおける人生経験を振り返った回想的なデータに依拠せざるを得ないという問題である。第2に、「予期せぬ」や「偶然」そのものの用語の操作的定義の問題である。第3に、個々人の人生経験を振り返った際に、往々にしてポジティブな出来事が語られやすい傾向がみられる。第4に、予期せぬ出来事に集中しており、人的なつながり（紐帶）を介して就職する可能性が看過されがちである。

以上で検討してきたように、就職の際には、予期せぬ偶発的な出来事から影響を受けることがあるが、こうした出来事は「人による仲介」によっても影響を受ける可能性があることが示唆されている。また、予期せぬ偶発的な出来事に備えるためには、日常からの準備が重要であり、予期せぬ偶発的な出来事が生じた際には、それに適切に対応するための心構えや行動力も求められる。言い換えれば、日常的に好奇心、持続性、柔軟性、楽観性、冒険心といった五

つのスキルを備えることで、困難に直面した際にも、それを乗り越えるための主体的な取り組む姿勢が必要不可欠である。

そこで、本研究では、「予期せぬ出来事が個々人の行動や選択に影響を及ぼす」という仮説を前提とし、日本語学科卒業生が現在に至るまでの就職や、転職において如何なる影響を受けてきたかについて、複線経路等至性モデリング(TEM)を用いて検討する。分析の視点としては、第一に、就職や、転職のプロセスにおいて人的つながり(紐帶)の効果に着目し、それが如何に予期せぬ偶発的な出来事をキャリアの転機へと結び付けているのかを明らかにする。第二に、調査対象者の内面的な思考や態度にも焦点を当て、予期せぬ偶発的な出来事に対する個人の対応や、それが就職に至る意思決定の背景に如何なる役割を果たしているのかを検討する。

3. 研究方法

3.1 分析方法

本研究の分析方法は、安田ほか(2012)の質的研究方法である「複線経路等至性モデリング」(Trajectory Equifinality Modeling: TEM)を用いて、日本語学科卒業生の予期せぬ出来事がキャリア形成に影響を及ぼすことを明らかにする。TEMとは、「時間を捨象せず個人の変容を社会との関係で捉え記述しようとする文化心理学の方法論」(安田ほか2012: 1)である。この研究方法は、不可逆的な時間の流れにおいて個人のライフコース上の変容、社会的文脈との相互作用の中で把握しようとするアプローチである。研究対象者数については、安田ほか(2012)が提示している「 $1 \cdot 4 (\pm 1) \cdot 9 (\pm 2)$ 法則」に基づき、本研究では11名の研究対象者を設定した。この人数は、研究対象者の異なるキャリ

アパスの類型を把握する上で、十分な規模であると考えられる。

本研究のTEM図は、大学卒業時点を就職の分岐点(Bifurcation Point, BFP)とし、就職(現職それとも初職)の時点を等至点(Equifinality Point, EFP)とする。すなわち、卒業後、個々人が異なった道を歩んでいくことをEFPと定義し、職につくまでの就職経路はそれぞれ異なった様相を呈しており、初職もしくは現職につく時点はEFPと定義する。また、初職もしくは現職までの過程は「経路」(Trajectory)であり、等至点までの時間は「非可逆的時間」(Irreversible Time)とする。TEMの特徴は、等至点までの経路の幅を可視化することができるという点にある。TEMの概念を用いる重要なポイントは、「分岐点、必須通過点的な事柄」を聞くことである。つまり、如何に選択したのか、選択の際に如何なる助けを得たり、如何なる障害に遭遇したかについて聞き出すことが重要である(安田ほか 2012)。本研究では、職に就くまでの就職経路において予期せぬ偶発的な出来事が如何に個々人のキャリア形成に影響を与えるかについて明らかにしたい。

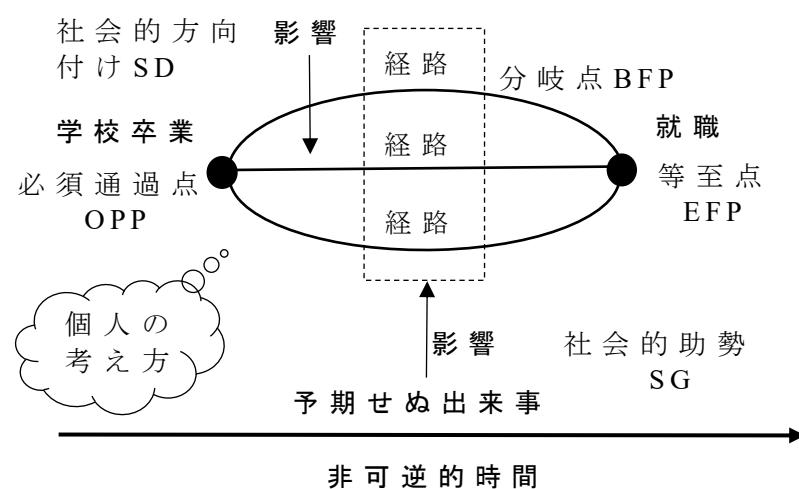


図1 本研究の複線経路等至性モデリング (TME) 図

注) 安田ほか (2012) により加筆作成。

3.2 調査時期

本研究の調査時期は、2025年1月20日から2月18日までであった。

3.3 調査対象

本研究の調査対象は、日本語学科を卒業し、現在、台湾における日系企業または日本の企業に就職している者である。これらの対象に対してインタビュー調査を実施した。調査対象の基本的属性については次の表1の通りである。また、インタビューの調査対象の選定方法は、コンビニエンス・サンプリング（Convenience Sampling）とスノーボール・サンプリング（Snowball Sampling）を併用した。

表1 調査対象の基本資料

番号	年齢	卒業年 学歴	所在地	現職	仕事 年数
No1	36歳	2014 修士	台湾	人材開発・研修センターマネージャー	10年
No2	38歳	2010 学士	台湾	アシスタントマネージャー・次長	14年
No3	36歳	2010 学士	日本	アシスタントセールスマネージャー	14年
No4	42歳	2010 学士	日本	管理部職員	20年
No5	35歳	2011 学士	日本	Country Manager	13年
No6	35歳	2012 学士	台湾	HRマネージャー	12年
No7	35歳	2017 修士	日本	スーパーバイザー	8年
No8	36歳	2011 学士 2014 専門学校	日本	ANAグランドスタッフ	10年
No9	33歳	2015 学士 2018 専門学校	日本	映像企画室室長	7年
No10	32歳	2016 学士	日本	QA Engineer	8年
No11	36歳	2011 学士	日本	リレーションマネージャー	14年

3.4 調査方法とデータ

3.4.1 質問紙法

本研究における調査協力者への質問紙によるアンケート調査の実施は、主として個人の性別や年齢、職業など調査協力者の個人情報に関するフェイス情報を収集したものである。インタビュー調査を実施する前に、調査協力者にアンケートへの回答を依頼した。

3.4.2 インタビューの調査方法

本研究では、半構造化インタビューを実施し、1回のインタビュー時間は概ね40分から1時間とした。録音した音声データを逐語的に文字起こしした。その後、質的分析ソフトウェアNVivo15を用いて、グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づくオープン・コーディングを実施した¹。また、質的研究の信頼性及び妥当性を確保するため、メンバーチェッキング（Member Checking）を用い、調査協力者にデータ内容の正確性を確認してもらい、必要に応じて修正を施すことで、本研究の内部妥当性を高めることを目指した（阮2014、王ほか 2010、潘 2022）。

4. 分析結果と考察

4.1 職業移行の「経路」に関する軌跡：初職から現職までのTEM図分析

本研究では、まず図2に示すように、11名の研究参加者それぞれについて、初職から現職までの経路をTEM図で作成した。しかしながら、参加者ごとに経路が異なり、かつ紙幅

¹ グラウンデッド・セオリー・アプローチのコーディングには、(1)オープン・コーディング、(2)アキシャル・コーディング、(3)セレクティブ・コーディングの三つの方法がある。本研究では、予期せぬ出来事の様相を洗い出すため、オープン・コーディングの方針を使用した。

の制約上、全員のTEM図を詳細に説明することは困難であった。そこで、本研究では、必須通過点(OPP)、分岐点(BFP)、社会的方向付け(SD)、社会的助勢(SG)、等至点(EFP)の概念を用い、個別のTEM図を統合した総合版(図3)を作成し、分析を行った。

11名のキャリア経路は非可逆的時間の観点から、(1)キャリアの適応期、(2)キャリアの形成期、(3)キャリアの安定期の3段階に大別できた。

第1に、キャリアの適応期では、参加者は台湾で就職するか日本で就職するかの選択に直面し、職場に適応する時期であった。全員に共通するOPPは、日本語学科卒業生(大学または5年制専門学校)であり、その後のBFP1において、No7、No9、No11は卒業直後から日本で就職し、他の参加者は一旦台湾で就職していた。また、BFP2では、No1、No2、No11の3名が台湾での就職を継続していた。SGの観点からは、就職に至る経路として、No2、No4、No9は学校教員、No5は後輩、No1、No6は大学時代のクラスメート、No3は職場の同僚、No7、No11は友人、No10はインターンシップ先の上司からの紹介を受けていた。これらの結果から、就職初期において人的つながりが強く作用していたことが明らかとなった。また、No1、No2、No3、No4、No5、No8、No11の7名は、台湾の日系企業または日本企業でカルチャーショックや職場葛藤を経験し、そのうちNo8およびNo11は職場のハラスメントを経験していた。

第2に、キャリア形成期では、参加者はBFP3において転職や部門異動の意思決定を迫られた。その要因として、Covid-19の影響(No6、No11)、ワーク・ライフ・バランスの追求(No3、No8)、部門の改編(No5)、家族の介護(No10)、職場適応(No7)、企業の将来性(No1、No4、No9、No10)などのSDが挙げられた。その影響のもとでBFP4において

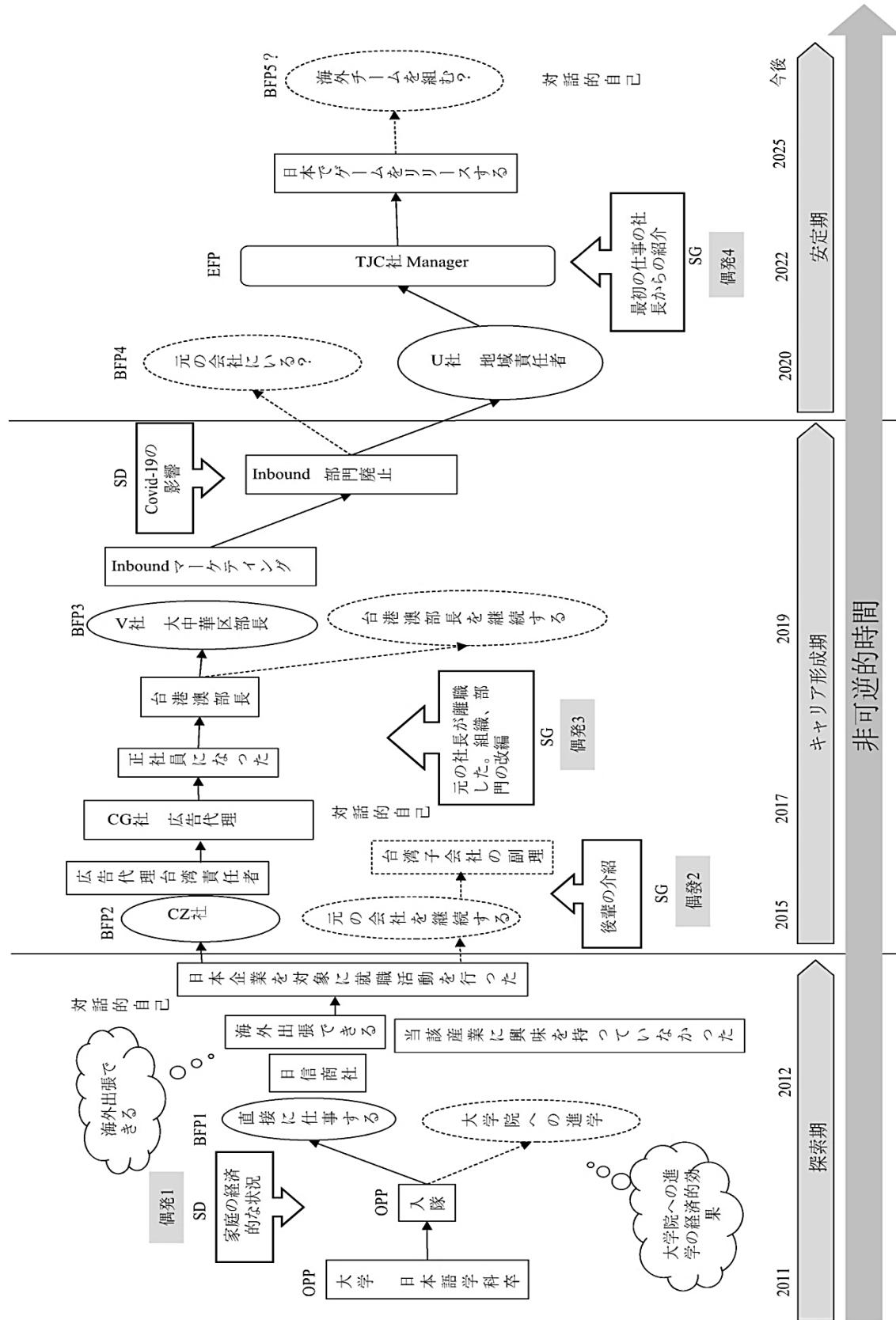
では台湾への帰国か日本での継続就労かの選択に直面しており、多くがキャリアの連続性を考慮し、日本での就労継続を選択した。転職・部門異動の契機は、前上司からの紹介（No3、No5、No10）、前同僚からの紹介（No4）、業務上のつながり（No9）、友人からの紹介（No11）であり、人的つながりが転職活動においても重要な役割を果たしていた。また、これらの経路は、Granovetter（1985=1998）が指摘する「職業上のコンタクトを介して、前職に近い職務に就く傾向」と一致している。

第3に、キャリア安定期では、No4が他社へ転職した一方で、他の研究参加者は現職を継続していた。No1、No2は職務遂行能力やキャリア形成の向上を目的として大学院進学を選択した。この時期の参加者は一定の職場経験を有し、管理職への昇進や永住権の取得が現実的となるなど、長期的視点でのキャリア形成を視野に入れていた。

4.2 計画的偶発性理論の事例

4.2.1 予期せぬ偶然的な出来事で就職に結びついた事例

本研究で計画的偶発性理論の概念を枠組みとして用い、日本語学科卒業生11名を対象にインタビュー調査を実施した。先行研究で論じたように、ライフコースに関する人生経験を振り返った回想的なデータの妥当性や信頼性の確保が課題となっている。そのため、本研究ではインタビュー調査に先立ち、11名の研究参加者に対して事前調査を行い、データの信頼性を高める工夫を施した。また、インタビューの際には、「予期せぬ偶然的な出来事」の定義を具体的な事例を交えて説明し、研究参加者が計画的偶発性理論の概念を理解したうえで回答できるように配慮もした。さらに、「予期せぬ偶発的な出来事」そのものの長短を問わず、想起できる具体的な経験を明確に叙述することも求めた。



註) 個人のプライバシーを保護するため、会社名を伏せた。

図2 No.5の初職から現職までの経路のTEM図

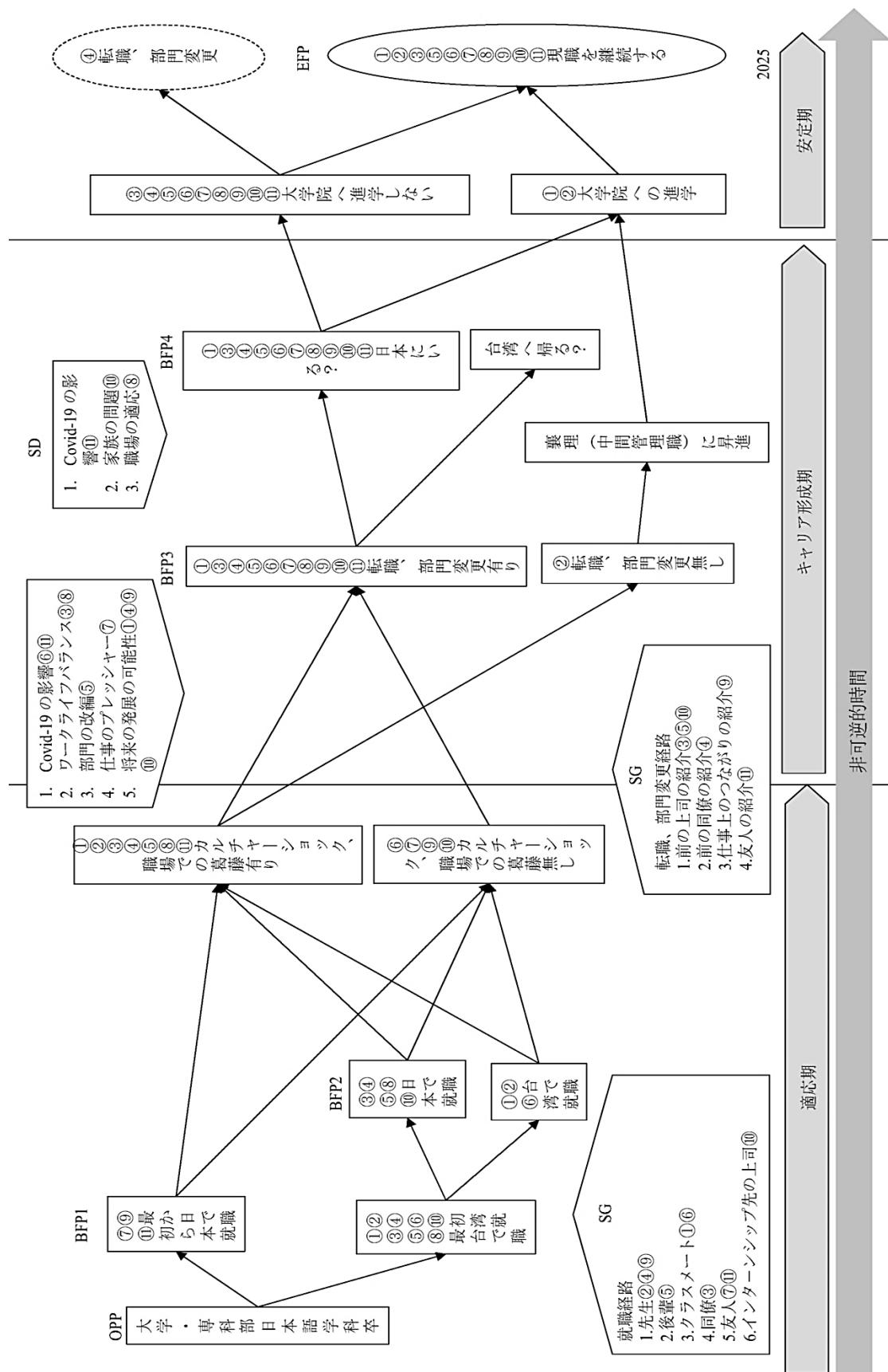


図3 11名研究参加者の初職から現職までの経路のTEM図

その結果、11名の研究参加者がライフコースにおける人生経験を振り返る過程で、「予期せぬ偶然的な出来事」を経験していたことが確認された。また、それらの出来事は程度の差こそはあるものの、研究参加者の人生行路や、キャリア形成に一定の影響を及ぼしていたことも明らかになった。こうした知見を踏まえ、本研究では代表的な3名の事例を取り上げ、より詳細に検討する。

● 事例 1

ある日の午後、かつての同級生から突然電話がかかってきました。彼女は「私たちの会社にひとつのポストが空いているんだけど、興味ある？マーケティングの仕事なんだけど」と言いました。私は「でも、マーケティングがどういう仕事かよくわからない」と答えました。すると彼女は「明日すぐに面接に来てくれない？午後2時に来られる？」と続けました。私は「実はもう他の面接の予定が入っていて、まずはそちらをきちんと終えてから、御社の面接を受けたいのだけれど」と伝えると、同級生は「大丈夫、そんなにプレッシャーを感じなくていいから、とりあえず来てみて」と気軽に誘ってくれました。そうした経緯から、私はやや消極的ながらも面接を受けることになりました。その面接は順調に進み、結果として私はその一社のみの面接で就職が決まり、現在に至るまでその会社で勤務を続けています。

(No1)

● 事例 2

当時、特にこれといった仕事を探していたわけではなかったんです。ちょうどその頃、大学の日本語学科の先生が半分冗談のように「そろそろ兵役が終わる頃だけど、仕事を紹介してあげようか？」と声をかけてくださったんです。

正直に言えば、学生の頃から営業職にはあまり良い印象を持つていませんでした。実際、その求人にも「営業職」と書かれていたので、あまり乗り気ではなかったんですが、「どうせ受からないだろう」という気持ちで、経験の一つとして面接に行ってみることにしました。まったく予期していなかった展開だったのですが、結果として採用され、今もその会社で働き続けています。…（中略）当時、突然先生から電話がかかってきて、「今日の午後5時に面接があるけど、行ける？」と言われました。私がその電話を受けたのは午前10時過ぎで、その時はまだ彰化にいて、履歴書も何も準備していませんでした。もともと面接を受けるつもりもなかったので、当然そのための準備もしていませんでした。そういう予期せぬ出来事に直面した結果、午後の時間を利用して台中から高雄への新幹線に乗っている間、ずっと手書きで履歴書を作成していました。（No2）

やはり、先生を通じて紹介された機会だったので、先生の顔に泥を塗るようなことはしたくないという気持ちがありました。最低限のマナーとして、誠意を持って対応しようと考えました。（No2）

● 事例 3

当時、同級生から「うちの会社の面接を受けてみないか」と誘われ、仕事内容も悪くなさそうだと思ったので、とりあえず受けてみることにしました。最初はアシスタントとしての業務を担当していましたが、次第にコンサルティング会社の業務内容が人事や採用に深く関わるものであることを理解するようになりました。このような人事コンサルタントとしての役割を、およそ7年間にわたって担当していました。（No6）

事例 1（No1）は、他社の面接予定を控えている際、同級生からの予期せぬ誘いを受け、マーケティング職の面接を受ける機会を得たというものである。当初、本人は該当分野への理解が十分ではなく、消極的な姿勢を示していた。しかしながら、同級生が背中を軽く押してくれたため、面接を受けてみようという積極的な態度に転換し、面接を受けた結果、その一社のみで就職が決定し、現在も勤務を継続しているという事例である。

事例 2（No2）は、大学の恩師からの予期せぬ電話によって営業職の面接を勧められたというものである。当初、本人は営業職に対して好意的な印象を抱いておらず、面接を受けるかどうか迷っていた。しかし、恩師の「指示」、すなわち「押し」という外的要因がきっかけとなり、面接当日の午後 5 時に面接を受けることを決断した。この過程において台中からの新幹線の車中で面接のための履歴書を一生懸命に手書きで準備し、消極的な態度から積極的な行動へと転換しているという事例である。

事例 3（No6）は、事例 1（No1）と類似するキャリア経路を示しているものである。同級生からの予期せぬ誘いをきっかけとして、ヘッドハンティング会社の面接を受ける機会を得た。当初、本人は人事コンサルタント職に対して明確な職務イメージを持っておらず、同級生からの誘いに応じて面接を受けた結果、その会社に採用され、現在に至るまで仕事を継続しているという事例である。

以上の三つの事例から明らかなように、予期せぬ偶発的な出来事はわれわれの身近に存在しており、それに気づいて積極的に対応することで思わぬよい結果へつながる可能性があることを示している。これらの事例から、以下の 3 点を指摘することができる。

第 1 に、予期せぬ偶発的な出来事は、本人の内的欲求と一致した場合、人生行路における一歩を踏み出す契機となり得ることである。それは、心の中では「やってみたい」という潜在的な動機を抱えていたとしても、その実行に至るきっかけがない場合、予期せぬ偶発的な出来事が、後ろからのプッシュ（押し）のような役割を果たし、消極的な態度から積極的な行動へと転換させるものである。この点から、予期せぬ偶発的な出来事を前向きに受容し、それを新たなキャリア機会へと転換する柔軟性と冒険心の重要性が示唆される。

第 2 に、就職過程における人的つながりの効果が顕著なことである。事例 1 (No1)・事例 2 (No2)・事例 3 (No6) はいずれも「同級生・恩師の人的なつながりを通じた予期せぬ偶発的な出来事」が新たなキャリア転機となっている。同級生（クラスメート）や教員といった強い紐帶を通じた「口添え」は、就職に至るまでのコンタクトの連鎖、すなわち紹介媒介者数を減らす効果や就職に繋がる可能性を高めると言える。それは、人的なつながりの強い紐帶を媒介として、紹介者の信頼性を損なわないよう、被紹介者が自らの最も優れた一面を發揮しようと努めるという側面が伺える。

第 3 に、予期せぬ偶発的な出来事が生じたとしても、それを「やりたくない」「できない」「間に合わない」「まだ準備していない」などとネガティブで受け止めるのではなく、積極的に受け入れ、挑戦する姿勢、すなわち冒険的な態度を持つことである。換言すれば、人生行路において困難に遭遇したとしても、それを恐れず、挑戦しようとする姿勢こそが、偶発的出来事を学習機会やキャリア発展の契機へと転換させる要因の一つであると考えられる。

4.2.2 予期せぬ偶発的な出来事に対する行動

予期せぬ偶発的な出来事が起こった際、研究参加者は如何に対応するのか。本節では、研究参加者が予期せぬ偶発的な出来事を機会として捉えた場合に如何なる行動を選択・実行するのかを検討する。

● 事例 1

私の人生において、実際、自分が何をするかを事前に計画することはあまり多くなかったです。多くの場合、何か機会が訪れたときに、「ちょっと、やってみよう」という気持ちで動くことが多かったです。…(中略)もし偶発的な出来事に直面したときに、私自身としては、過去の努力や準備の積み重ねがあったからこそ、機会が訪れた際に即座にそれを活かすことができた、という点が重要だったと思います。これは、私が「蓄積の重要性」と呼んでいることです。(No1)

● 事例 2

私は学生時代に多くのサークル活動に参加し、学会やサークルなどにも積極的に関わっていました。こうした活動の中で、さまざまなことを学ぶことができ、それをとても楽しんでいたように思います。それらは一見すると小さな出来事—たとえば、企画書を書いたり、成果発表会を開催したりといったことかもしれません、そのような経験の一つ一つが、今の仕事へと少しずつ繋がっていったように感じています。(No9)

事例1(No1)の場合、事前に明確な計画を立てることは必ずしも多くないが、予期せぬ機会が訪れた際に積極的かつ冒険的な姿勢で行動に移す傾向がみられる。一方、事例

2(No9)の場合、日頃から小さな出来事や経験を見逃すことなく、その積み重ねによって機会が到来した際に、これまで積み重ねた経験を十分に活用し、積極的に対応する姿勢を示していた。

これら二つの事例が示す要諦は、過去の学習経験（例：サークル活動や課外活動）が現在に至る個々人の職業選択に結びついていることである。予期せぬ偶発的な出来事が我々の人生行路においていつ訪れるかを事前に予測することは極めて不可能である。したがって、こうした予期せぬ偶発的な出来事に備えるためには、日常的な準備や、経験の蓄積が必要不可欠である。また、予期せぬ偶発的な出来事を通じて就職に至ったことは、「偶然の幸運」が降臨したことと捉えるのではなく、むしろこれまでの経験や能力の積み重ねの努力によって効果が得られたからである。これらの小さな経験の蓄積が個々人の貴重な資源となり、予期せぬ偶然的な出来事が生じた際に恐れることなく、それによって対応することが可能となる。この点から、日常的な学習や行動の積み重ねが、予期せぬ偶発的な出来事をキャリア形成へと転換させる「蓄積の効果」、すなわち「キャリアの連続性」であると考えられる。

4.2.3 予期せぬ偶発的理論の五つのスキル

先行研究で言及した予期せぬ偶発的理論が提示した五つのスキル（好奇心、持続性、柔軟性、楽観性、冒険心）のうち、本研究においてインタビュー調査の分析からは、とりわけ、「冒険心」および「好奇心」の二つの側面の事例が顕著に見出された。そこで、本節において三つの事例を通してその具体的な様相を検討する。

● 事例 1

私の成功体験の多くは、会社の中でまだ誰も手を付けていない仕事に取り組んだことから生まれました。私は比較的ストレス耐性があり、困難な状況を乗り越える覚悟があります。また、多くの人が最良の選択ではないと考える道であっても、それが成功すれば2倍、3倍の成果が得られると信じ、労力を惜しまず挑戦してきました。こうした姿勢は、これまでの職業人生の中で偶発的な出来事への対応や、私自身が進んで引き受けたリスク、そしてそこから得られた成果と深く結び付いていると考えています。(No5)

● 事例 2

同期入社の同僚の中には、〇〇航空の業務を担当する者もあり、台湾人の乗客が多いため、中国語を多用できる環境で働いていました。そのことを羨ましく感じたこともあります。一方、私が担当した航空関連業務では、日本語と英語の使用が中心であり、その結果、3年間で自分の日本語力と英語力が大きく向上したと実感しています。(No8)

事例1(No3)は、これまで誰も踏み込んでいない新たな仕事領域への挑戦を志向していた事例である。未知の分野に飛び込むことで、成功すれば、2倍、3倍の成果が獲得できる一方で、ストレス耐性や、高いプレッシャーへの対応力が求められる。事例1(No3)の成功の方程式は、予期せぬ偶発的な出来事に積極的に対応し、リスクを引き受ける「冒険心」に基づき、新たな領域に挑戦し、成功する場合、他者を上回る何倍もの成果が獲得できるという点が読み取れる。

事例2(No8)は、他者の仕事ぶりに刺激を受け、自らも不慣れな領域に挑戦した事例である。その過程において、自らの英語と日本語双方の語学力が向上したことは、挑戦を恐

れることなく、積極的に受け入れることがスキル向上につながった好例である。

これらの事例から、以下の3点を指摘することができる。第1に、過去の職務経験を基盤として活用しつつ、キャリアの連続性を維持することの重要性である。第2に、「冒険心」や「好奇心」を持ち、従来の枠組みを超えて、不慣れな領域や職務に挑戦することで、人生行路に新たな可能性を切り開く可能性がある。第3に、予期せぬ偶発的な出来事に対して積極的に対応し、受容する態度が、成功への第一歩となり、困難に直面したとしても、それを乗り越える姿勢が求められる。

4.2.4 SGおよびSDによるキャリア形成への影響

我々の人生行路において、予期せぬ偶発的な出来事がしばしばポジティブな影響とネガティブな影響の双方として作用する。本節では、人生行路におけるSGおよびSDによるキャリア形成への影響について検討する。

● 事例 1

大きな要因は新型コロナウイルス感染症の影響であると考えています。パンデミックが始まった当初、多くの事柄がオンライン化され、同時にワーク・ライフ・バランスの重要性が広く意識されるようになりました。仕事以外に、学び続けられる環境への関心が高まり、そうした産業に興味を持ったことが、今回応募に至った理由です。(No6)

● 事例 2

当時はコロナ禍の影響により台湾への長期帰省が可能となり、結果として通算3か月以上滞在することができました。その一方、唯一揺らぐことのなかった点は、日本での生活、すなわち日本で蓄積したキャリアを放棄しないという意識

でした。一度その機会を失すれば、将来的に再び得ることは難しいと感じていたからです。結果として、日本での職業的基盤を維持したまま、母親の介護のため3か月間帰国することを条件に、会社と合意に達しました。(No10)

● 事例 3

パンデミック後、銀行全体の業績が悪化し、私の所属していた部門が閉鎖されました。そのため、やむを得ず○○○○商業銀行東京支店に戻ることになりました。…(中略)
私にとって最大の偶発的な出来事は、まさにこの新型コロナウイルス感染症です。長年の夢をやっと実現させたにもかかわらず、一時は本気で台湾へ戻ろうと考えました。

(No11)

分析結果から、事例1(No6)、事例2(No10)では、この予期せぬ偶発的な出来事はポジティブな影響として作用していた一方で、事例3(No11)では、ネガティブな影響として作用していたことが確認された。

具体的に、事例1(No6)はコロナ禍により、仕事から教育に至るまでの領域でオンライン化・オンデマンド化が急速に進展し、インターネットを媒介とした学習形式が急速に普及したことである。この変化を契機として、自らの人生における新たな道が開かれ、オンライン学習関連業界への進出を果たしたというものである。

事例2(No10)は、コロナ禍の影響で渡日が困難となったことを契機に、3か月間の休暇を取得し、台湾で親の介護に従事していたものである。この予期せぬ偶発的な出来事の契機により、親の介護のためキャリアの継続を断念せず、家族の一員としての責任も果たすこともできたという事例である。

以上の事例と対照的に、事例3（No11）は、コロナ禍で所属部門の廃止により、過去の職場へ戻ることを余儀なくされた。この出来事の背後には、単なる職場異動にとどまらず、失業のリスクというネガティブな側面が存在していた。

以上の事例から、新型コロナウイルス感染症という予期せぬ偶発的な出来事は、個々人の人生行路やキャリア形成に多大な影響を及ぼし、その影響が正負（SGかSD）のいずれであっても、如何に困難を乗り越え、さらにはその転機を自らにとって有益な転機へと転換できるかが問われることが明らかとなった。この点も、計画的偶発性理論における最も重要な趣旨の一つである。

5. おわりに

5.1 日本語学科に属する学生のキャリア発達への示唆

本研究の知見から、日本語学科に属する学生のキャリア発達について、以下の5点が示唆される。

第1に、一定水準の日本語力は、台湾における日系企業や、日本の企業に就職する際の前提条件として欠かせないものである。事例分析からは、日本の企業において外国人労働者に必ずしも日本語能力試験 N1 の資格が求められるわけではないが、一方で職務遂行に直結する日本語力が強く求められることが明らかとなった。したがって、日本語学科卒業生にとって、実務に対応できる日本語力を確実に身につけることが望ましい。また、日本語力のみならず、異なる領域に応用可能な横断的な知識やスキル、そして持続的な学習能力の育成は、職場における熾烈な競争を生き残るための最善な方策であると考えられる。

第2に、職場適応においては、ストレス耐性および対人コミュニケーション能力が重要視される。職場においては、異なる性格や価値観を有する多様な人々と関わることは回

避できない。そのため、学校環境よりも複雑な人間関係に直面することが多く、こうした状況に適切に対処するためには、高いストレス耐性が求められる。また、円滑な人間関係を維持し、チームワークで協働的に職務を遂行するためには、対人コミュニケーション能力が欠かせないことは言うまでもない。

第3に、人的つながりを媒介とした予期せぬ偶発的な出来事をキャリアの転機へと活用することが可能である。在学中の同級生や教員といった「強い紐帶」を通じて、予期せぬ偶発的な出来事を具体的なキャリアの転機へと変換されることが可能となる。とりわけ、強い紐帶を介した「口添え」は就職活動におけるコンタクトの連鎖を短縮し、早期に就職決定を可能にする効果がある。しかしながら、近年の若年者においては、先輩や後輩といった「まれにしか会わない」弱い紐帶のみならず、同級生や教員との人的つながりが希薄化している傾向があり、人的つながりを媒介とする紐帶の機能が後退している可能性がある。

第4に、常に好奇心や冒険心を保持し、不慣れな領域や分野に踏み込むにも、日常的な経験の蓄積や事前準備を十分に活用することが求められる。在学中に、積み重ねた学習経験は、将来的にキャリア発展の契機として作用する可能性がある。すなわち、日常的な経験の蓄積や事前準備、すなわち「キャリアの連続性」は、未知の領域や分野に対する不安を軽減し、予期せぬ偶発的な出来事を人生行路における有益な「助力」へと転換させる基盤となる。

第5に、社会的方向付け(SD)、もしくは社会的助勢(SG)によって影響を受けたとしても、その予期せぬ偶発的な出来事を前向きに受容し、積極的に対応する姿勢が重要である。分析事例からは、SG、SDに起因する出来事に対し、前向きに直面しつつも、それを乗り越えるための解決策をも模索

することにより、個々人のキャリア形成における新たな道が切り開かれる可能性がある。

5.2 研究制限と今後の課題

本研究では台湾の日系企業および日本の企業に就職している日本語学科卒業生を対象として、計画的偶発理論の視点でインタビュー調査を実施した。11名の研究参加者についてTEM図を作成したが、紙幅の制約上、全員のTEM図を詳細に記述することは困難を極めた。それゆえ、当該事項が本研究の研究制限の一つとなっている。また、本研究では、研究参加者の選定にあたり、スノーボール・サンプリングという資料取集の手法を採用したことにより、研究参加者の年齢層は32歳～42歳に集中する傾向がみられる。ゆえに、40歳代以上のサンプル数が比較的に少数となり、人生行路におけるキャリア形成の在り方に関する多様化を十分に把握できない可能性が存在することは否めない。したがって、今後の課題としては、40歳代以上のサンプル数を拡大し、より幅広い年齢層を含めた分析を実施することで、多様なキャリア形成の在り方をより包括的に検討する必要がある。

参考文献

中国語

王文科・王智弘（2010）「質的研究的信度與效度」『彰化師大教育學報』17、29-50

阮光勛（2014）「促進質性研究的品質與可信性」『國教新知』61(1)、92-102

潘淑滿（2022）『質性研究理論與應用（第2版）』心理出版社
英語

Kathleen E.Mitchell, Al S.Levin, John D.Kurmboltz, 1999,
Planned Happenstance: Constructing Unexpected Career

Opportunities, Journal of Counseling & Development,
77, 115-124.

日本語

Albert Bandura (2019) 「社会的学習理論における因果関係のモデル」祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊編著『社会的学習理論の新展開(新装版)』金子書房、55-86

浦上昌則・高綱睦美・杉本英晴・矢崎裕美子 (2017) 「Planned Happenstance 理論を背景とした境遇活用スキルの測定」『アカデミア. 人文・自然科学編』14、49-64

浦上昌則・矢崎裕美子・杉本英晴・高綱睦美 (2023) 「大学新入生の適応感に対する計画された偶発性理論の適応—新しいキャリア理論の教育現場への導入に向けて—」『アカデミア. 人文・自然科学編』25、41-61

下村英雄・菰田孝行 (2007) 「キャリア心理学における偶発理論—運が人生に与える影響をどのように考えるか—」『Japanese Psychological Review』50 (4) 、384-401

John D.Kurmboltz, Al S.Levin (2004) Luck Is No Accident, Impact Publishers, Inc. (= J.D. グランボルツ・A.S. レヴィン (2005) 花田光世・大木紀子・宮地夕紀子訳『その幸運は偶然ではありません!』ダイヤモンド社)

Mark Granovetter (1985) Getting a Job, The University of Chicago.(= M グラノヴェター (1998) 渡辺深訳『転職—ネットワークとキャリアの研究』ミネルヴァ書房)

安田裕子・サトウタツヤ編著 (2012) 『TEMでわかる人生経路—質的研究の新展開』誠信書房

- 吉川 雅也 (2018) 「社会的学習のコンテクストにおけるハプンスタンスの理解：キャリア形成への Happenstance Learning Theory の適用」 『研究論集』 108、 119-136
- 渡辺 深 (2014) 『転職の社会学－人と仕事のソーシャルネットワーク』 ミネルヴァ書房

〈付記〉

本研究は113年度国科会専題研究計画（計画番号 NSTC 113-2410-H-160-009-SSS）の研究成果の一部である。